

2021 年度  
九州共立大学と八幡西区役所・折尾商連  
地域連携事業プラン

# 折尾学Ⅱ



九州共立大学  
スポーツ学部（スポーツ学科）  
経済学部（地域創造学科）



## 目次

プロジェクトメンバー（P 2）

はじめに（P 3）

I 協同組合折尾商連（P 4）

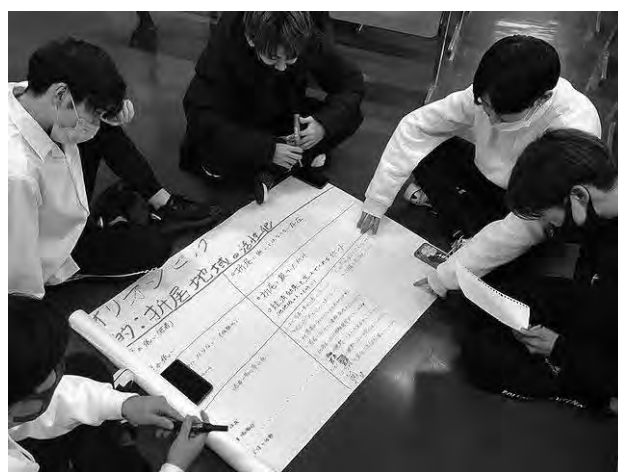
II オリオンピック実行委員会（P 8）

III 折尾地区総合整備事務所（P 12）

IV おりお堀川を愛する会（P 16）

V UNIQLO（ユニクロ）折尾店（P 20）

おわりに（P 23）



## プロジェクトメンバー

九州共立大学経済学部地域創造学科 2年

	氏名		氏名
1	精木 真矢	19	谷川 陽紀
2	池田 亘輝	20	永田 洸太
3	石橋 志乃	21	西島 雅史
4	伊藤 賢時	22	野口 凌
5	宇曾 未夢	23	野間 大暉
6	浦山 昂之	24	花田 峻希
7	江崎 皓斗	25	濱田 駿輝
8	小川 恵太	26	林 明徳
9	尾崎 琴音	27	廣池 朝陽
10	鹿島 遥稀	28	福垣内 優大
11	河岡 芳和	29	藤野 京平
12	木林 大和	30	古川 悠人
13	小森 大地	31	古谷 雄也
14	柴田 楽歩	32	前田 晴紀
15	城後 翼	33	眞鍋 京奨
16	新谷 一里	34	森本 瑛大
17	新谷 健人	35	安枝 龍輝
18	立川 一輝	36	柳田 蓮

### 指導者

山田 明 (九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科)

尾上 百合加 (九州共立大学経済学部地域創造学科)

### 協力団体

八幡西区役所

協同組合折尾商連

オリオンピック実行委員会

折尾地区総合整備事務所

おりお堀川を愛する会

UNIQLO (ユニクロ) 折尾店



## はじめに

今回、発刊される「折尾学Ⅱ」は、北九州市八幡西区役所と九州共立大学との包括的地域連携協定に基づく地域連携事業であり、昨年度の「折尾学Ⅰ」の続巻です。ボランティアの学生が、折尾が持つローカルな知を再発見し、大学での学びを深めることを通じて地域活性化に貢献するまちづくり活動です。

地域を支えているのは地域住民であり、「ひとづくり」をすることが「つながりづくり」をもたらし、「まちづくり」になると考えられます。その意味で折尾学のような地元をフィールドにした活動に取り組む意義があり、地域活性化への効果も期待できると思います。折尾学はいわゆる地域学というジャンルに含まれますが、この地域学の成果を地域住民が活用し、地域の魅力を再認識することが効果的だと思います。

「折尾学Ⅱ」では、折尾を拠点に活躍されている皆様へのインタビューを実施し、その地域活性化に関わる活動の内容を町内外に広報することになりました。学生ボランティアが、地域のフィールドで情報を収集し、分析をもとに整理をしました。折尾の地域活性化に寄与することで学生も多くのことを学ばせていただきました。地域への愛着も高まり、交流することでコミュニケーション能力も向上したようです。大学としても地域の拠点としての役割を果たすことができました。

「折尾学Ⅱ」の冊子を折尾の地域住民の方に活用していただき、地域のアイデンティティを喚起する地域活性化に繋げていただければ幸いです。本プロジェクトを実施するにあたり、地域連携協定の提携先である北九州市八幡西区役所、折尾商連の関係者の皆様、心よくインタビューを引き受けていただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

2022年1月  
九州共立大学  
地域連携推進センター所長  
山田 明

# I 協同組合折尾商連

～折尾の商店街を地域の中心に～

## 1. 団体について

協同組合折尾商連は、昭和の発展とともに組織化され、折尾商連の前身「折尾商工連合会」（通称：折尾商連）が1954年に設置された。当時は商・工業者で結成した任意団体だったが、1986年10月に法人化され、現在の「協同組合折尾商連」となった。構成する組合店舗数は、ピーク期には250店舗となったが、大型ショッピングモールの台頭やロードサイドへの商業施設の増加により、現在は106店舗に減少している。商店街の形態は、小倉、黒崎の商店街のようにアーケードのあるメイン通りはなく、大きく3つの地区に分かれて商店が点在している。

20年にも及ぶ折尾地区総合整備事業で、一時的なまちの分断化や事業者の移転で商店街周辺は、大きな影響を受けているが、そのような状況でも、行政や地元の団体と連携して、まちののにぎわいや一体感を創出しようと様々な事業を行っている。

折尾商連では、①販売促進委員会、②総務委員会、③おりおマップ委員会、④IT委員会の4つの委員会を設置して事業の企画・運営を行っている。各委員会には、地元自治会や大学、高校の関係者などが適宜参加しており、各事業についての協力を要請するなど連携体制を構築している。

## 2. 団体概要

折尾商連

（住所）福岡県北九州市八幡西区折尾3丁目1-32 協同組合折尾商連会館

（電話番号）093-691-1462



【写真：おりおねっと】

### 3. 具体的な活動内容について

#### (1) 折尾地区賀詞交歓会

平成元年より開催し、北九州市、八幡西区役所、大学、高校、小中学校、幼稚園、折尾地区自治区会、企業商業者等、約 230 名が集う新春年始の会を開催し、横のつながりを構築している。

#### (2) 折尾まつり

令和元年 6 月に第 30 回を迎えた地域に長く愛されるまつりである。九州共立大学、九州女子大学、産業医科大学、北九州市立大学など約 40 の団体、事業所で実行委員会を組織して約 5 か月間の準備期間を経て 2 日間にわたり開催されている。

#### (3) 学園大通り活性化事業

平成 28 年より、折尾の玄関、メイン通りとしての学園大通りにスポットを当て、おもてなしイベント等を多彩に行う事業を実施している。ベンチの設置、プランター設置、清掃、イベントの実施により、折尾に来街されたお客様が安心安全にお買い物して頂き、街の雰囲気を楽しんでいただくことを目的としている。

#### (4) 折尾イルミネーション事業

平成 9 年より開始し現在に至る。学園大通り、堀川飲食店街にイルミネーションを設置している。オープニングイベントで点灯式を行っている。

#### (5) 折尾名物の開発

地元折尾愛真高校とのコラボで製作、販売を開始した名物第 1 弾「おりをろまん」は高校生が製造し、商連加盟で販売している。また、地元高校生の発案による洋菓子で、同じく高校生デザインのパッケージを使用した折尾名物第 2 弾「ビスコッティ・レガーロ」を開発した。

#### (6) 折尾地区の情報発信

折尾のタウン誌として、ORI-NAVI「折尾案内」を年 4 回発刊、平成 21 年より現在まで 3,500 部を無料配布している。また、SNS に対応するホームページ「おりおねっと」を制作し、スマホへの対応強化、動画コンテンツの制作等、様々な折尾の最新情報を全国に発信している。

#### (7) 空き地の有効活用

折尾地区総合整備事業の進捗に伴い、当地区では商業者や事業所が大幅に減少しており、同事業者が完了する令和 7 年も迫り、低迷する折尾駅周辺地域の活性化と賑わいづくりのため、駅周辺の空き地等にキッチンカーやコンテナハウス等を活用したプランを計画、実施している。

#### (8) 販売促進

「プレミアム得々商品券」の販売や「おりおシールの発行」を行い、加盟店の売り上げ増進と顧客の固定化を図っている。

#### 4. 折尾のまちとの関わりについて

長期にわたる折尾地区総合整備事業で一時的なまちの分断や事業者の移転で商店街周辺は、大きな影響を受けている。そのような状況で、行政や地元の団体と連携してこのまちのにぎわいや一体感を創出しようと様々な事業を行っている。折尾は10,000人にも上る学生が行き交う北九州有数の学園都市である。そのような地域特性から折尾商連は、商店街が長年にわたり培ってきた地域との絆や人のつながりを活かし、地域住民と高校や大学を繋ぐ地域のコミュニティのハブとして地域連携事業を展開している。

具体的な例として九州共立大学の生徒も参加しているイルミネーション事業がある。この事業は学園大通りにフォトスポットを作ろうとイルミネーションを設置する際、九州共立大学の大学祭実行委員会やサークルに所属している学生が設置のお手伝いを行ったボランティア活動である。そのボランティアに参加した学生は、「将来、地域に貢献できるような職に就きたいと考えており、実際にこのような折尾のまちに貢献できる貴重な体験ができて嬉しかった。」という感想を持った学生もいた。このような事業を行うことで学生にまちづくりの経験の機会を与えている。また、イルミネーション事業のほかにもキッチンカーステーションなどの事業を行い、住民の生活をより豊かにすることに貢献している。



【写真：全国商店街支援センター 活性化事例 学生や地域との協働で未来に引き継げる元気な街を育む】

#### 5. 折尾商連が抱える課題

折尾商連の方が考える商店街が抱えている課題は人材不足だ。特に学生の存在が折尾商連の様々な活動に必要である。今まで折尾商連は多くの活動で学生の力を必要としてきた。30年の歴史がある「折尾まつり」や、2016年の新名物スイーツの商品開発、学園大通りのイルミネーション事業などの運営に学生が参加してきた。今となっては折尾のまちの活性化には学生の力が欠かせない。また現在新型コロナウイルスの影響で開催できなかった、「折尾まつり」の復活が計画されている。今回は運営だけでなく、企画にも学生がかかわる事業が行われている。しかし商連にはまだ人材が足りていない。

まずは折尾商連の後継者が不足している。組織内の高齢化が進んでおり、将来の折尾商連の担い手が不足しているという現状がある。また、商店街の加盟店の減少、経営者の高齢化も進んでいる。地域内での高齢化が進んでいるため、仕方ないことではあるが、商店街で新規事業を行う若者や、店舗を継ぐ



人もおらず人材は減る一方である。

### 編集後記

- このインタビューを通して折尾商連が、地域において非常に重要な役割を果たしていることが分かった。また商店街を経済の中心から、地域における交流の核として役割を変えたという点も非常に勉強になった。私は実習で商店街についても事業を考えているのでとても参考になった。この貴重な経験を他の分野でのアウトプットできるようにしていきたい。(城後 翼)
  
- 地域の課題に向き合う責任感と重要性について知ることができた。また、折尾商連は折尾というまちで暮らすうえで、気付かないところで様々な活動をしていたことを知ることができた。今回得ることのできた経験を今後の学習や社会へ出たあとの行動に繋ぐことができるようにしていきたい。  
(河岡 芳和・小川 恵太)
  
- 折尾商連にはいろいろまちづくりの考え方の工夫や社会貢献をしていることがわかった。この経験を活かし授業で学んでいきたい。(楢木 真矢)
  
- 今まで商店街について詳しく知らなかったが、商店街の現状や課題を知ることができた。また、折尾商連が抱える問題はどこの地域も抱えている問題が多いことが分かった。また、取材した内容をもとに細かくグルーピングして分析することの大切さを知ることができた。  
(宇曾 未夢・尾崎 琴音・林 明穂)
  
- まちづくりが行われるまでの過程や折尾商連の歴史を学ぶことができた。今回学んだことは、地域の人の関わり的重要性が一番大事なことだと思った。(古川 悠人・古谷 雄也)
  
- インタビューをして、折尾商連の方々の熱意を感じた。私も折尾商連のような協同性や実行力を身に付けていきたいと思った。また、身に付けたことを授業のディスカッションで使えるようにしていきたい。(木林 大和)

## II オリオンピック実行委員会

～オリオンピックを折尾になくってはならないものに～

### 1. 団体について

オリオンピック実行委員会は、地域ボランティアグループ「折尾零の会」が中心となり JR 折尾駅近くを流れる堀川などを舞台にカヌーレースなどユニークな競技を楽しむイベントを企画運営している。

このオリオンピックは、長年愛される祭り「折尾まつり」に次ぐイベントを新しく立ち上げたいという春木聡さんの熱い思いから生まれた。折尾まつりは、折尾商連が中心となった実行委員会が企画、運営を行っており、2019 年で第 30 回を迎えた地域から長く愛されるまつりである。2020 年、2021 年と新型コロナウイルス感染拡大のため開催が中止されたが、コロナ以前は 5000 人も地域の方が参加していた。このような折尾まつりを目の当たりにし、春木さんはまちの活性化のために一番活動しなければならない自分たち 40 代が何もしていないことに気づき、私たちの世代も負けてられないと行動したことがオリオンピックの始まりである。発起人の春木聡さんらが折尾ならではの資源を使ったイベントにしたいと、様々な人たちに相談した結果、JR 折尾駅近くを流れる堀川などを舞台にカヌーレースを行うなど、他にもユニークな競技を楽しむイベントとなっている。

オリオンピックという名前は 2016 年に開催されたリオデジャネイロ五輪にちなんで、「折尾」と「オリオンピック」を組み合わせ命名された。「折尾のまちを元気づけよう」「もっと折尾周辺の方に折尾の歴史に触れてもらいたい」といった思いから 2016 年 11 月に折尾二三会によって第 1 回オリオンピックが開催され、当時は大人 40 人と折尾愛真短期大学の野球部の学生 40 人で実施された。その後、翌 2017 年に同会の有志で、地域ボランティアグループ「折尾零の会」を立ち上げ、オリオンピック企画・運営が引き継がれた。零の会は、折尾を盛り上げたいという折尾近辺の 40 代を中心とした若手経営者と有志約 20 名で構成されている。



【写真：オリオンピック公式 HP より】

オリオンピックポスター(左)、ロゴマーク(右)】

## 2. 具体的な活動内容について

第1回	2016年11月
第2回	2017年9月10日
第3回	2018年9月9日
第4回	2019年9月8日
第5回	2020年9月13日
第6回	2021年8月1日、9月12日



【写真：春木様提供（ZOOMでの様子）】

2016年から始まり2021年で第6回を迎える。1チーム5人の団体競技で、具体的には、豆運びレース、空き缶立てレース、新聞投げレース、石炭運びレース、そして、堀川カヌーレースといった、誰もが笑顔になる5種目の競技で行われている。

第5回（2020年）から新型コロナの影響を受け、大会の開催が危ぶまれたが、オリオンピックの目玉であるカヌーレースは中止とし、ビデオ会議アプリ「ZOOM」を使用したオンラインで開催した。第6回（2021年）は同じくコロナ禍の開催となったが、カヌー競技や石炭運びレースが復活し、折尾駅周辺でのリアル競技とオンライン競技と日程を分けるなど「ハイブリッド」開催だった。

カヌーレースはこれまでの2倍の片道約180メートルに延ばし、1チーム2人で往復してタイムを競った。レースの様子を動画配信し順位当てのクイズを予定していたため、九州共立大学の学生らがカメラ約10台で動画撮影した。優勝者には3万オリオン（折尾で使える地域通貨3万円分）をプレゼントされている。今回は企画から競技進行までの大部分を大学生が主体になって運営した。



【写真：春木様提供（石炭運びレース(左)、カヌーレース(右))】

### 3. 折尾のまちとの関わりについて

#### (1)折尾になくてはならないイベントへ成長

オリオンピックを始めるにあたって、最初は商店街の知り合いの方々や地域住民に「何を馬鹿なことを言っているのか」や「意味ないことはしないほうがいい」と反対されることがあったが、一生懸命に取り組んでいくうちに周りの人たちに頑張りが連鎖し、手伝ってくれる人たちが徐々に増え、開催にこぎつけることができた。現在は、6月の折尾まつり、7月の夏越祭、9月のオリオンピックと、折尾の年間行事の一つとして認識されるようになった。

#### (2)堀川の浄化活動

オリオンピックはイベント運営資金を様々な企業・個人・自治体からの協賛を受け活動している。集まった協賛金はイベント運営費を差し引いた分を堀川浄化のための資金としており、堀川のヘドロや異臭を改善するために微生物製剤スラッジアウトを入れ、川底の土壌改善を行う環境活動を行っている。

### 4. オリオンピック実行委員会が考える課題

課題として「人」ということが挙げられていた。折尾には多くの大学生がいるため、イベント運営の担い手として徐々に大学生で回していくような仕組みを作ることで、大人はまた新たなイベント立ち上げる側に注力したいと思いがあった。

実際に、九州共立大学の地域創造学科が新設されたこともあり、第4回大会には3割、翌第5回大会は7割と徐々に大会の運営に関わる大学生の割合が増えていったが、その矢先に新型コロナウイルスの影響を受けてしまった。そのため、先輩から後輩にバトンを繋いでいくという流れが断ち切れてしまったことで下級生が十分に育ておらず、イベントの企画運営に携わる若い層の人材育成ができていないことが、課題として挙げられる。

オリオンピックになくてはならない存在になりたい！！





## 5. 学生の考察

私たちがオリオンピックに関わり考え出した課題は学生（若者）の参加率が低いことにたどりついた。今のオリオンピックの現状は参加者の大半が高齢者である。「折尾になくてはならない存在」にしていきたいオリオンピックにとって、未来につなげる若者がいないということは、見通しがたたないのと同じである。そして県外からくる大学生が多いため継続が難しく、大学の授業でも扱う機会がないので、引継ぎがとても困難になっている。

そこで私たちが考えた解決策は、地元の中学校や高校でオリオンピックの講演を行い地元の若者にオリオンピックを知ってもらうことである。そのためにも、我々地域創造学科などが地元の中高に出前授業を行い、生徒たちにオリオンピックの競技に触れる機会を増やすことで、オリオンピックを知ってもらうきっかけになる。地元の中高生に知ってもらうことにより、地元で「参加しよう！」と思う学生が増え、引継ぎができる可能性が大幅に上がる。このようなことから、私たちは、地元の中学校や高校に講義することが若者参加率アップへの近道だと考えた。

### 《編集後記》

- 今回の調査を通じて、「イベントによる地域活性化」の難しさを痛感した。春木さんからの貴重な応答をもとに、独自の解釈で検討を開始したが、序盤の原因の追求から苦戦した。
- 学生のまちである折尾地域が、若者の参加を課題としている中で、若者である私達が解決策を挙げるのは容易だと考えていた。しかし、現状を知り、SNS で呼びかけるといった簡単な案では効果がないこと、類似事例の少なさから、この課題がとても困難であることなど、多くのことを認知し、多くのことを学んだ。
- 今回オリオンピックについて初めて知り、少しずつ調べていくうちに、毎年進化を遂げているオリオンピックに感銘を受けたが、更なる成長を遂げるためには学生の目線の思考必要になっていくと感じた。
- 地域が抱える問題の解決に努めることは本当に大変だった。しかし、地域について考えることで経験を得たという実感した。大学生という社会に出ていない非力な立場でありながらも、微力ながらも地域に貢献していきたい。



### Ⅲ 折尾地区総合整備事務所

～住みやすく、魅力的で、賑わいのあるまちづくり～

#### 1. 団体について

折尾総合整備事務所は職員が30名の事務所であり、事務職と技術職の建築職と土木職で構成されている。大きく分けて課は2つに分類されており、様々な企業との調整ごとや事業の計画、地域支援を担当している事業調整課と整備を行うための計画立案から設計、施工の監督などを受け持つ整備課の2つの課に分かれて整備の観点から折尾のまちづくりに携わっている。

平成14年度に折尾総合開発事務所として開設され、現在の折尾総合整備事務所という名称には平成20年に変更されている。連続立体交差事業、街路事業、土地区画整理事業の3つの事業手法を組み合わせ、折尾地区の折尾駅を中心とした再整備を行っている。

#### 2. 団体概要

北九州市建築都市局

折尾総合整備事務所（旧：折尾総合開発事務所）

〒807-0874

北九州市八幡西区大浦二丁目13-7

TEL.（事業調整課：093-602-3108）

（整備課：093-691-2522）

FAX. 093-602-3128



【写真：折尾地区総合整備事業パンフレット】

職員30名（事務職6名/技術職24名）

- ・事業調整課…事業計画、実施計画及び事業の進捗管理、関係団体との連絡調整及び、連続立体交差事業の工事に伴う調整を行う。
- ・整備課…土地区画整理事業の実施、街路事業等の実施（調査及び建設並びに工事）を行う。  
プロジェクト型のチームを組んで活動している。  
3つの事業手法を組み合わせ、折尾地区の折尾駅を中心とした再整備を行っている。



工事中の折尾駅舎（令和2年10月末時点）

【写真：折尾地区総合整備事業ニュース「おりお」第38号】

### 3. 具体的な活動内容について

折尾地区は以前から鉄道による市街地の分断、踏切による交通渋滞や道路などの基盤整備の遅れ、学園都市の玄関口としての商業・業務・文化施設の不足、古くからの密集市街地の存在などの問題を抱えている。このような問題を総合的に解決し、折尾地区を「学園都市や学術研究都市の玄関口」にふさわしい地区拠点として再構築するために、●連続立体交差事業、●街路事業、●土地区画整理事業を一体的に実施する「折尾総合整備事業」を進めている。

連続立体交差事業では、鉄道による市街地の分断や踏切による交通渋滞の解消を図るため、折尾駅周辺の鹿児島本線、筑豊本線、短絡線の3つの鉄道において、トンネル化や高架化等を進めている。令和3年度末に全線高架化が完了予定である。

街路事業では、交通渋滞の解消と折尾駅へのアクセスを改善するとともに、歩行者の安全性や回遊性を向上させ、沿道商業の活性化を目指している。鉄道の高架化にあわせて、道路の拡幅・新設及び折尾駅北口駅前広場の整備を進めている。

土地区画整理事業では、住環境の改善や防災性の向上を図り、将来にわたって安全・安心に暮らせるまちづくりを目指している。事業区域を3つの地区（堀川町、東側、鉄道跡地）に分割し、連続立体交差事業の進捗にあわせて計画的に進めている。

### 4. 折尾のまちとの関わりについて

整備事業や折尾のまちをより良くしていくためには、行政だけで進めていくのではなく、折尾の住民と一体となって進めていくことが大切である。そこで、折尾の地域の方々と定期的に意見交換をしながら事業を進めている。具体例を挙げると、折尾総合整備事業をきっかけに、折尾地区の再生・発展に向けたまちづくりを進めるために、これまで折尾のまちづくりに取り組んできた様々な団体（地元自治区会、折尾商連及びその他まちづくり団体）がひとつになり設立された「おりお未来21協議会」が検討を重ねて、「折尾まちづくりビジョン」を市に提言した。歴史的建造物の保全と活用に関する提言は、折尾駅舎の外観を大正5年当時に可能な限り再現する、以前の折尾駅舎の備品を新駅舎で使うなど実際に意見が反映されている。

事業期間が長期的にわたる基盤整備的な事業では、工事の騒音や交通規制により地域住民の方々に迷惑を掛ける。そこで、事業用地などを活用し、地域の方々と連携して工事期間中のにぎわいづくりに取り組んでいる。

「オリオンピック」〔令和3年9月〕

折尾にちなんだレクリエーション(例：石炭運びなど)をチームで競い合う

「高架ウォーク」〔令和2年2月〕

事業の進捗の実感とにぎわいづくりを目的として開催(来場者5,210人)

「ありがとう折尾駅舎」〔平成24年度10月〕

旧折尾駅舎解体の感謝イベント(来場者3万人)

## 5. 団体が抱える課題

折尾総合整備事務所が抱えている課題は大きく分けると2つである。

### (1) 土地区画整理事業の遅れ

折尾総合整備事務所では、「具体的な活動内容について」で記述したように、住環境の改善や防災性の向上を図り、将来にわたって安全・安心に暮らせるまちづくりを目指して、土地区画整理事業を行っている。しかし、事業実施期間が平成18年度～令和7年度（清算期間5年を除く）の予定だったのが、平成18年度～令和10年度（清算期間5年を除く）まで3年間延伸することになった。また土地区画整理事業の遅れに伴って関連する街路事業についても事業実施期間が延伸する。この事業期間が延びた要因として、建物などの移転交渉に時間を要していると考える。そのため、移転交渉をスムーズに行えるようにすることが課題である。



【出典：折尾地区総合整備事業 区画整理ニュース 令和3年12月16日第24号】

### (2) 折尾総合整備事業終了後のまちづくりの担い手

折尾総合整備事業は、令和10年に事業完了予定としており、この事業終了後は、折尾総合整備事務所は役目を果たし、無くなる予定である。そのため、現在は折尾総合整備事業に伴い設立された「おりお未来21協議会」のような団体や折尾総合整備事務所などが、住民と協力してまちづくりを行っているが、事業終了後は、こうした団体との関わりや団体自体が無くなっていく可能性があるため、住民のみで、主体的にまちづくりを行っていく必要性が出てくる。そこで今後は、住民が主体的にまちづくりを行って



いくために、新たなまちづくりの担い手を探すこと、あるいは育ていくことが課題となってくる。

## 6. 学生の考察

「折尾総合整備事業終了後のまちづくりの担い手」の課題は、住民が主体的にまちづくりを行っていくために、新たなまちづくりの担い手を探すことあるいは育ていくことが課題である。その課題を解決するためには、まちづくりについて学べる機会・興味を持ってもらう場を提供することだと考える。

具体的には、令和4年春オープン予定の折尾駅高架下のまちづくり記念館や九州共立大学などの場所を利用して、まちづくりの知識を学べる教室のようなイベント、地域経済を学ぶ大学と提携したまちづくりイベントを実施し、住民のまちづくりに対する意識を向上させる。また、定期的にアンケート調査などを行い、理解度や認知度を計測して、イベントのフィードバックを行う。

このような課題解決策を行うことにより、住民のまちづくりの対しての意識が向上し、住民が主体的にまちづくりを行い、折尾がより良いまちになっていくと考える。

## 編集後記

- 地域の方々との協力についての質問や事務所の考えるまちの魅力について聞くことで、地域の魅力を活かした持続的なまちづくりを地域住民が行うためには、まちの魅力である学生の数や昔に似せた駅舎などを活用したイベントの前例が必要だと思った。(西島 雅史)
- 折尾総合整備事務所の考える理想的なまちづくりの形について学んだことで、まちをよりよくする為の政策を考えるのではなく、まちを変革し続けるために後継者をも巻き込んだ多角的な政策が必要だと改めて考えさせられた。(永田 洸太)
- 折尾総合整備事務所の目標であるまちづくりを達成するためには、地域の方々との協力はもちろん商業施設との兼ね合いも大事であることが分かった。我々学生がイベントを運営することで賑わいあるまちづくりができると思った。(谷川 陽紀)
- 折尾総合整備事務所の方々の話を聞くことで、全てがうまくいっているとは限らないということがわかった。これからのまちをより良くしていくには、話し合う場を設ける必要があると思った。(柳田 蓮)
- 折尾総合整備事務所が行っていることや、問題を聞いて、学生や電車を利用する多くの人が利用する折尾のまちを発展させること、多くの政策を考えること、課題や解決策など、1つの団体での、まちづくり案を出していく難しさを学んだ。(伊藤 賢時)
- 折尾総合整備事務所そして地域の人考える理想のまちづくりや解決すべき問題、街の魅力などを学んだことで何事も順調にいかないものがあるということが分かった。しかし、地域の人協力があつてこそ、この事業が続けられる。一方的な政策ではなく、人々と協力してともにまちをどう発展していくかを考える大切さを知った。(新谷 健人)
- 区画整理事業やそれについての問題を聞いて、また類似事例などを調べて、同じ様な事業でも場所によってうまくいってない場所もあり、その地域の魅力を活かしたまちづくりを進めていく難しさを知った。(藤野 京平)
- 今回の折尾学で、折尾総合整備事務所が行っていることや課題、解決策を出すだけでも多くの時間が掛かることを知った。また、まちの魅力などを知ることが出来た。(浦山 昂之)

## IV おりお堀川を愛する会

### ～隠された堀川の魅力～



【写真：著者撮影】

#### 1. 団体について

「おりお堀川を愛する会」は平成 14 (2002) 年 11 月に重藤一<sup>しげとうはじめ</sup>さんにより立ち上げられた団体である。所属人数は 30 名で、そのうち正会員は 10 名の法人格を有しない団体である。

堀川は治水利水のために掘られ、物流の手段としての役割を担いながら流域に大いなる恵みを与えていた。近年、ヘドロやゴミが堆積するようになりもとの美しさが失われつつあった。これにより、自然やまちを大切にする気持ちは薄れていった。このような状況の中で、地域住民や地域の学生、ボランティア団体、行政が協働して、流域のかけがえのない財産である堀川を愛する活動を始めた。また、重藤さんの“堀川を清掃したら何が出てくるのだろうか”という興味が堀川を清掃し始めた。はじめは“自分たちで引き上げたゴミは自分たちで処分しなければいけない”ということに躊躇していた。そのような中で、北九州市が『史上最大のごみ拾い大作戦』ギネスに挑戦』を企画していた。イベントに参加し、どれだけ多くのゴミを堀川の中から回収できるのかを目指していた。引き上げたゴミはすべて持って行ってくれるという確約を役所と取ったうえで実行していた。最初から団体として活動するというよりも、ゴミを引き上げる目的で仲間を集めて行ったというのが堀川を清掃する最初のきっかけである。平成 13 年、堀川流域の自治体である北九州市・中間市・水巻町が中心になり、「堀川の再生」をテーマに「堀川を考えるシンポジウム」に参加し、翌年、平成 14 年に「堀川でまちおこし」を目的に「おりお堀川を愛する会 (遊創倶楽部)」を設立した<sup>1</sup>。これまで、おりおメダカの展示や講演会、小学校への出前授業、堀川いっせい清掃といった各種イベントを開催してきた。

おりお堀川を愛する会の活動目的は、「多くの人に愛着を持ってもらい、人と人、地域と地域のコミュニティの再構築」、「水生生物の保護・育成、地域資源の掘り起こしと有効活用」である。自分たちが毎回毎回ゴミ拾いをしていくというよりも、いろんな人に体験してもらいたいということが団体の本来の本筋になる。大学生や高校生が体験できるような、学生が主体となって地域と関わるができる活動を団体がサポートするという形を構築した。



【写真：「堀川まちおこし事業報告書」より】

<sup>1</sup> 「おりお堀川を愛する会」という名称は活動開始後に名付けられた名称である。

## 2. 具体的な活動内容

おりお堀川を愛する会の具体的な活動内容としては以下の2つが挙げられる。

### (1)堀川いっせい清掃

本来物流の手段としての役割を担っていたが、近年その役割を終え需要が減ると人々のまちに対する意識が薄まり、ゴミ等が不法投棄されるようになった。そのような中で、堀川を清掃したら何が出てくるのかという重藤さんの興味をきっかけに、①堀川の大切さを多くの人と共有する、②ふるさとを愛する心を育む、③モラルとマナーを向上させ、堀川をきれいな川に再生させるといった住みやすいまちになることを目指し、平成14年より当該活動が始まった。以降、「堀川まちおこし事業」の一環として、多数の高校、大学といった学校教育機関や地域自治体などによって毎年10月上旬に行われている。



【写真：「堀川まちおこし事業報告書」】

### (2)堀川流域に生息する生物の保護育成および環境保全

堀川で新生物であるニホンクロメダカが発見された。当時は大きな反響もなく、特にメダカが絶滅危惧種に登録されているとはいえ北部九州は他の地域に比べるとメダカは多く生息しているため、あまり注目されなかった。一般的には関心を持たれないため、小学校の子どもたちに向けて発信し、保護活動として各小学校で飼育してもらい取り組みを行っている。当該取り組みは、子どもたちに生物の存在を知ってもらい、卵から産まれて稚魚が育っていく様子を学習の一環として提供している。

## 3. 折尾のまちとの関わりについて

おりお堀川を愛する会を立ち上げる以前は、重藤さんが折尾の様々な団体に所属していて交流があった。堀川いっせい清掃は、偶然飲み場で堀川を清掃したら何が出るのだろうという話題から興味本位で始めた活動である。はじめは団体としての活動ではなく個人の活動であった。

立ち上げ後は、折尾商連の事務局長と共に会を動かしており折尾にある団体や企業を含め学校など様々な人々と関わりながら様々な活動をしている。特に学校や学生とのつながりを大切にしており、堀川いっせい清掃を単なる「清掃」が目的ではなく、“堀川のことを知る場”、“社会教育の場”、“フィールドワークの場”と定義しており、そのときの主役は学生という風に思っている。

また、堀川を意識してもらうためには、子どもたちに発信することがスタートと考えている。清掃時に発見されたニホンクロメダカを捕まえ、折尾東小学校や折尾西小学校などに保護活動として学びの場を提供し、生物が育っていく過程を学習の一環とした取り組みを行っている。だが、興味を持たないと堀川を意識することはないのが現状である。だからこそ堀川いっせい清掃を通して環境や郷土愛のことを意識したり、仲間や組織のつながりを意識したりすることで、つながりの大切さを知ってもらい、おりお堀川を愛する会と折尾のまちの関わりを深めていこうということとしている。

#### 4. 団体が抱える課題

おりお堀川を愛する会の抱える課題は大きく分けて2つである。

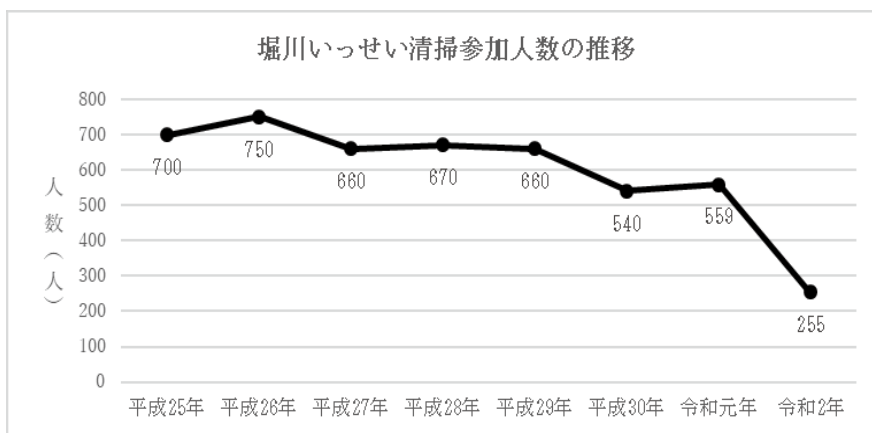
##### (1)地域の人の堀川に対する意識が低い

堀川は、およそ400年前に黒田長政によって開拓された人口の運河である。遠賀川から水が流れ込み、洞海湾までにも及ぶ全長12kmの一級河川である。折尾駅周辺を流れており、緊急車両が通ることのできない細い路地裏の、人目に付きづらい場所に位置している。堀川沿いには、居酒屋をはじめとする飲食店が立ち並んでいる。深夜営業の店だったり、閉店したりしている店も多く、立ち寄り難い印象がある。また、かつては運河として利用されており、生活の一部と言われるほど市民の生活に密着していた。しかし、現在は運河としての利用はなく、人々の堀川に対する関心は薄れていき、単なる“川”として認識されている。今では人口の運河として活躍していたころの堀川を知らない人がほとんどである。さらに、上流域・中流域の人々の関心が遠賀川<sup>2</sup>に奪われているのが現状である。遠賀川は広大な河川敷も整備しており、そこではイベントなども開催され、人々に楽しむ場として提供されている。そのため、人々の関心は、魅力の知られていない堀川よりも魅力の知れている遠賀川へと向かっている傾向にあるといえる。

堀川の長い歴史やあまり知られていない魅力をどのようにして人々に伝えていくのか、また、遠賀川に奪われた関心をどのようにして堀川にも関心に向けさせるのが課題となってくる。

##### (2)堀川いっせい清掃に対する認識に差がある

毎年10月上旬に開催される堀川いっせい清掃は、地域住民や高校生、大学生の参加が多い。右の図は、堀川いっせい清掃の参加人数の推移を表したものである。この図から、毎年700人前後の人が参加していることが分かる。令和2年度は新型コロナウイルスの影響もあり、参加人数の制限を設けたことで255人までに落ち込んでいる。



【出典：「堀川まちおこし事業報告書2020」より】

団体は堀川いっせい清掃を清掃が目的ではなく“フィールドワークの場”、“体験学習の場”と捉えている。しかし、参加者である学生たちは清掃をフィールドワークの場、体験学習の場と捉えていないのが現状である。団体と参加者の清掃に対する認識を同じものにする事ができれば、堀川いっせい清掃の本質が変わってくるのではないかと。

大学をはじめとする学校教育機関が多いという折尾の特徴を活かし、さらに地域や企業、行政などの団体と積極的に連携を図ることが大切である。連携するだけでなく、どのようにして認識の差をなくし、団体と参加者が清掃に対して同じ捉え方にしていくのが課題となってくる。

<sup>2</sup> 遠賀川は、嘉穂郡馬見山を源流として、福岡県の筑豊地区から北九州市・中間市・遠賀郡を流れる全長61kmの一級河川である。

## 5. 学生が考えた課題解決策

この団体の課題は「堀川に対する意識が低い」、「堀川いっせい清掃に対する認識に差がある」ことだと述べた。しかし、この団体の課題の本質は「多くの人に堀川を好きになってもらえない」ところにあると考えた。私たちは、「堀川」といっても川だけでなく、周りの飲食店も含めて“堀川”と捉えた。

なぜ多くの人に堀川を好きになってもらえないのか。それは、堀川周辺のお店のイメージが関係していると考えた。かつて“飲み屋街”として栄えていた頃のイメージがそのまま継続し、若者には「近づきづらい」、「怖い」というマイナスな印象を与え、立ち寄り難くなっていると感じた。また、高校生の通学路となっているが、若者向けのお店が少ないことも課題だと考えた。

この課題の解決策は「昔の古風な街並みを残しつつ、学生や若い世代に好印象を与える“アイキャッチ”」であると考えた。外観のインパクトを向上させ、また、店先にメニューを掲載した看板やのぼりで人々の目を引く工夫をしていくことが重要になってくる。この課題を解決させるためには、学生や地域住民、行政などが連携し、具体的にどうしていけばいいのか、ディスカッションやワークショップを重ね、様々な意見を取り入れながら検討していく必要がある。

私たちは、課題解決のための目標を「先入観をなくし、堀川の魅力を再発見すること」だと結論付けた。堀川周辺を近づきやすく明るい雰囲気にし、まだあまり知られていない堀川の魅力を多くの人に知ってもらいたい。そのためには、先程も述べたが、学生や地域住民、行政との連携が必要になり、それ以外にも、街並みのコーディネーターや専門家などの協力が必要になってくると考えた。

これらを解決することで、堀川周辺は明るく近づきやすい雰囲気になり、お店にも気軽に立ち寄ることができるようになると考える。さらに、堀川に対しての印象が変化することで、今まで気付かなかった堀川の魅力を再発見し、折尾に住む人々だけではなく、折尾に住んでいない様々な人々に堀川の魅力を広めていくことができると感じた。

## 編集後記

- この学びを通して、堀川にはとても壮大な歴史があることを学んだ。堀川は「人口の運河」と言われており、当時の人々がすべて手作業で川を掘ったことを知り、先人たちの偉大さを感じた。この壮大な素晴らしい歴史のある堀川を、廃れさせることなく継承して欲しいと思う。(石橋 志乃)
- 今回の学びを通して、堀川の歴史や団体のこれまで行ってきた活動について学んだ。堀川沿いには居酒屋などがあり、それらを盛り上げたいという団体の意思を感じた。これらを知って堀川の歴史を後世に伝えたいとともに、新たな世界が見えれば良いと思った。(江崎 皓斗)
- 今までは川について関心を持つことがなかった。今回、堀川の状況について知り、まちづくりにおける川の位置づけなどを考えることができた。これからは川の存在意義などを含めてまちづくりについて考えていきたい。(新谷 一里)
- 今回、堀川とおりにお堀川を愛する会について学習していく中で、堀川が地域に対して果たしている役割と、また、団体の抱えている課題等を知ることができた。今後は、堀川が今以上に地域に密接し、地域資源として更に昇華させた姿になることを願う。(立川 一輝)
- 今回の取材において、堀川の歴史の深さ、団体の背景を知ることができた。堀川の歴史はある程度知っていたが、より詳しく知ることができた。団体では中間や他の地域と繋がっているがゆえの複雑さや意識の違いを知った。また、人のつながりの大切さを学んだ。(野間 大暉)

## V UNIQLO（ユニクロ）折尾店

～地域密着の愛される店に～

### 1. 団体について

ユニクロ折尾店は、商品企画、生産、物流、販売までを自社の一貫コントロールにより高品質、低価格でお届けしているカジュアルブランド「ユニクロ」を提供する製造小売業である<sup>3</sup>。ユニクロは世界中に2,312店舗あり、日本国内には810店舗を展開している<sup>4</sup>。

ユニクロ折尾店は1992年にオープンし、場所を移しながらも30年近くにわたって営業を続けている。もともとは199号線沿いにあったが、10年前の移転で現在の場所、折尾警察署の近くに移った。2020年6月にサンリブ2階の仮設店に移転し、リニューアルオープンに向けて建て替え工事が行われた。2021年4月9日、駐車場の駐車面積と売り場面積を倍増し、北九州最大級の売り場を持つ店舗としてリニューアルオープンした。ユニクロ折尾店は商業施設に入っている店舗ではなくロードサイド店舗である。ロードサイド店舗とは、都市郊外の交通量の多い幹線道路沿いに立地し、広い駐車場付きの比較的大型な小売店舗のことである。

折尾は鉄道の利便性から大学・高校等の立地が進み、学生数約10,000人の学園都市である。また、周辺部では住宅開発が活発に行われ、これにあわせて幹線道路の整備が進み、現在では、JR折尾駅の乗降客数は九州管内第5位の1日約3.2万人、サービス圏人口約20万人を抱える北九州西部都市圏の中心核となっている。このような様々な視点から、折尾に出店することを決めた。折尾は可能性を秘めたまちなのだという、折尾の魅力の一つ一つ抜き出しながら、折尾のことを様々な角度から調べ、事業に繋げている。さらに、“地域密着”に取り組みたいという思いがあり、「地域みんなでオープンを盛り上げよう、地域を元気にしよう」と、地域活性化に向けて取り組み始めている。地域で愛される店舗を目指し、折尾商連とも連携をしながら、新たなにぎわいづくりを行っている。



【写真：おりおねっと ブログ「新生ユニクロでオープニングイベント！」(2021.04.09)】

<sup>3</sup> ユニクロ HP より引用。

【URL】 <https://www.uniqlo.com/jp/ja/information/corp-about>

<sup>4</sup> FAST RETAILING CO., LTD. HP より引用。

【URL】 <https://www.fastretailing.com/jp/ir/financial/outlets.html>

## 2. 具体的な活動内容について

ユニクロは全国一律で展開する国内最大級のチェーンストアだが、ユニクロ折尾店は地域に密着したお店づくりを目指し、地域に愛され、地域を元気に、地元の人たちと一緒に盛り上げていこうと様々な取り組みを試みている。

実際に、ユニクロ折尾店のリニューアルオープンを“地元の方々や企業と一緒にオープンを成功させたい”という思いから、東筑軒や折尾愛真高校と連携して様々な企画を実施した。“折尾ならではの”ものにこだわり、オープン当日には、オープニングセールとあわせて、東筑軒や資さんうどんとタイアップによる大抽選会や、折尾愛真高校発案の「おりをろまん」を来店したお客様に2、300個配布した。「おりをろまん」は自分たちが配るよりも、どうせなら生徒たちから受け取った方がよいのではという考えから、ユニクロとコラボしたオリジナルのTシャツを作成し、折尾愛真高校の生徒からお客様へと手渡しされた。

リニューアルオープンを機に折尾商連に加盟し、折尾商連が発行するプレミアム商品券の取扱店舗になるなど、地域コミュニティの一員として折尾の中で経済循環を図っている。このプレミアム商品券の効果を最大化するためには、今回の商品券をきっかけにお店の魅力を来店したお客様に伝え、継続的な消費増加につなげていきたいと考えている。



【写真：おりおねっと ブログ「新生ユニクロでオープニングイベント！」(2021.04.09.)】



【写真：おりおねっと 名産・土産 (東筑軒かしわめし (左)、銘菓おりをろまん (右))】



### 3. 今後の展望について

持続的に事業を続けていくには、折尾のまちが元気でなければならない。地域社会と共存に向けてユニクロ折尾店では、単に自分たちの商品を提供するだけでなく、地元の人たちとのつながりが必要不可欠だと考えている。堀川いっせい清掃など、地域の活動に参加することで地域の皆様とのつながりを持ち、いつでも買い物しなくても気軽に立ち寄ることのできるお店づくりを目指している。ユニクロ折尾店に来店することで、様々な折尾に関する会話が自然と生まれる、そんな場所にしていきたいと考えている。

コミュニティに人が入ってくるのではなく、人が集まってコミュニティが形成されるというカタチで、まちの中でコミュニティの中心に立てるようにしていきたい。お店に来たらユニクロの商品もあり、折尾ならではの商品もあったり、折尾の様々な情報を得ることができる“情報発信基地”になることが将来のユニクロ折尾店の理想の姿である。これからは、ロードサイド店舗ならではの地域と親密な関係を築き、他のユニクロ店のモデルケースとなれるように地道な努力で、地域の人々に愛される店舗形成を図りたい。

#### 編集後記

- ユニクロは衣料品の製造・販売を行っているだけだと思っていた。しかし、地域との交流を大切にしておき、「地域に愛される店」や「地域のコミュニティの中心となる場所」になるように様々な取り組みを行っており、地域との連携を大切にしていることが分かった。(花田 峻希・濱田 駿輝)
- 今まで「ユニクロは大手企業だから、困っていることはとくにないだろう」と考えていたが、実際にユニクロ折尾店の方々の話を聞くことで、ユニクロ折尾店および他店舗の様々な苦勞や工夫を知ることが出来た。ユニクロ折尾店は、ロードサイド店舗の良さを活かして、地域活性化に向けて新たな賑わいづくりを行っていることが分かった。(柴田 楽歩・野口 凌・安枝 龍輝)
- ユニクロがこんなにもまちに対して積極的に行動を行っていることを初めて知った。特に地元の高校と協力しているということに興味を持った。私たちも協力できることがあれば行いたいと思った。ユニクロにさらに興味を持つことが出来た。(池田 亘輝・眞鍋 京奨)



【写真：著者撮影】



## おわりに

人口減少、少子高齢化、地域産業の衰退、地域創生など、今まで以上に地域に大きな注目が集まっています。そのため、まちづくりに興味がある学生は増えているように感じています。しかし、特に自分の住んでいる地域の歴史や現状などは、教科書に載っていない限り、意外と知らないことが多いのではないのでしょうか。

私たちは昨年度に引き続き、様々な角度・観点から総合的に折尾地域を学ぶ「折尾学」を開講しました。ちなみに、昨年度では折尾地域の過去について、本学が位置するこの地域の歴史を知り、あらためて地域のこれまでの歩みを再認識することができました。今年度は「折尾の現在」というテーマで、折尾地域の現状やその課題についてインタビューを通じて様々な角度から検討してきました。これにより様々な団体が、いかにこのまちのことを真剣に考えて行動しているかが垣間見ることができ、地域密着とはどういうことかを改めて考える貴重な機会となりました。

現在、商店街は自社の商品を提供するだけでなく、祭りやイベント等を通して地域コミュニティを支える中心的な役割を果たしています。そして、またこれからの役割を全うするために新たな担い手を必要としています。北九州有数の学園都市に立地する大学として、地域とどのようなかかわりができるのかをこれからも模索していきたいと考えています。

最後になりますが、本冊子の編集にあたりまして、八幡西区役所総務企画課企画課長内村英樹様、主査松原淳生様には大変お世話になりました。また、インタビューを快く引き受けていただきました協同組合折尾商連 桑原正樹事務局長、オリオンピック実行委員会 春木聡様、折尾総合整備事務所事業調整課坂元啓一郎係長、㈱ワイズファースト宮川賢一様、そして校正を手伝ってくれた地域創造学科 2年石橋志乃さんには、心より感謝とお礼を申し上げます。

九州共立大学 経済学部 地域創造学科  
尾上百合加





令和3年度 八幡西区役所・折尾商連・九州共立大学 地域連携事業

## 折尾学Ⅱ

---

発行 令和4年3月

山田研究室・尾上研究室

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8

TEL : 093-693-3403

E-mail : y-akira@kyukyo-u.ac.jp





九州共立大学  
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY